態・明治・大正・昭和の時代を通して、鶴見半島が軍事上（陸海軍）の要地だったわけです。外敵を防ぐために、とりで（通称方里の長城）が佐伯藩の命令によって築造され、その時に巌石ができたものでしょう。そして、このとりでは、明治十四、五年頃、猪垣に修築、利用されて現在に至ったものだと推察されます。

「猪留垣」の歴史的由来、それが持つ地域の特殊性、社会的立場、そして日本の動向について考察を試みました。

先輩諸賢の方々の御批正を仰ぎたいと存じます。

（おわり）

書翰

お召艦を迎えた日

宮崎県日向市美々津町在住
佐伯市出身
賛助会員　狩生秋仙氏より（編集者記）

（掲載許諾）

啓上　御便り拝見、お送りしました古文書（附記）がお役に立ちます由、何よりと思います。

「佐伯史談」第五十一号も、興味深く拝見いたしました。小生在竹時代、竹田から高千穂、阿蘇盆地一帯を遊びました人で、高木先生の探訪記も面白く拝見した事でした。尚高千穂高校の沢氏は延岡商業に在任中、補導主任で、小生は富高の補導部長として、年に三回は県北補導協議会で連絡を持ち合っていた方、同校の校長は小生と共に富高に十年間一緒にいた人、世の中は広いようで狭いものだと心から思っております。

さて、御同封戴いた「佐伯郷土史年表」ですが、これを見ているうちに小生は思い出した事があります。そこで小一時間ほどかかって、古い日記を探し出したのですが、同冊子の「大正時代」、大正十四年の下段（郷土）の欄が幸いにブランクになっています。若し補正でも役立ることがありましたら、そこを埋めてほしい事項があるのです。その為に古い日記を探し出したのですが、当時書いた通りに写してみます。

七月十七日　水曜・摂政宮殿下御召艦長門にて、戦技御観覧の為佐伯湾行啓・第三皇子高松宮殿下御召艦扶桑にて全上（前八時半御入港）・前十二時少し前伊東のおぢさんが来られて、豊州新報社からの電話であるが、貴方に此度の十二時の上りで大分へ行ってくれないか、との事に、豊州支局に行って見る。用事は本日の摂政宮お召艦のお写真を、夕刊に間に合う様、大分の本社へ届けてくれとの事。承諾してお金四円を貰い、その足で小野写真館に行って写真を受取り、廿分しかないので直ぐ俥を走らせて駅に向い断くにして間に合う。大分着三時。降雨の為俥にて豊州新報本社に行き写真を渡して、大分発下り三時五十七分にて帰る。

写真と書いていますが、本当は、ガラスの種板を現像したばかりで、まだ濡れたままの物でした。これが大正十四年のことです。

大正十年の八月には、佐伯駅ホームで東郷元帥をお迎えしたこともありました。十一年の日記を見ても書いてないところを見ると、十一年だったと思います。小生は十一年から日記を書き続けていますので。

くだらぬ事を記しましたが、御参考になるものならと思いまして。

尚五月定例現地研修会によりますと、丹頃―振寄―

なこと割面ですが、耳賀の海岸に神崎六平氏の彰徳碑が建っている筈。題字は藩主も利子爵、撰文はとくなられた佐藤蔵太郎翁、小生は二日かかって書きましたが、署名はしていません。昭和十二年三月に書いたものです。（以上）

（編集者附記）

一、以上は葉書に書かれた全文で、古文書と思いたのでその、お礼に、佐伯郷土史年表をご覧上げたところ折返しこのはがき使りで、全文悉く史実から昭和に入りての佐伯の歴史にふれているので、特にそうて全文原文のまゝ掲げさせて戴いました。

二、古文書は嘉永二年、蒲岸見廻りの方から、五浦の牛馬についてのことで、古市村源太を馬問屋に命じ、村々の取締世話役二十名を仰付け、牛馬売買等についての規定を申し渡した覚書で、藩政時代の五浦農民に対する畜産取締の政策を打ち出している。いずれ完全に近く読解の上、全文を資料として紙上に紹介しよう。

三、耳賀八幡神崎六平氏の彰徳碑のことは既に編集者も見聞していたもので当然、五月下旬の現地研修に会員の研究対象になるもの。一つの課題が与えられたことになる。

四、料生氏は旧姓土橋、旧姓佐伯中学（お母さま）本葉校、小学校代用教員として、東雲（ここで編集者と一しょに勤めた）耳賀等で教鞭をとり精勤よく児童カードで文検習字の検定をかちとり、中学教育に当り富島高校を最後に退職、目下美々津町にお住居である。郷土研究会の面で賛助協力下さっているので、本会賛助会員として歓迎している。

（三十二頁 下段より つづく）

灘は江戸時代の藩政の頃より、防衛方面への船の立寄り場所で栄り、また見張りとする国防上重要な地点であった。そして明治時代になると位置を利用して、林産物輸送の中継地となった。昔から灘に住む人々も、どこの部落や浦にもあるように、近隣の木立や堅田、吹、松浦等の地縁的、血縁的つながりを持って暮してきたごく自然の所のようである。

（つづく）

研究

佐伯の港はどんな動きをしているか

——主として木材の流通について——

佐伯豊南高等学校教諭
同校郷土誌クラブ顧問
本会会員　市野瀬　仁

第一章　港の変遷（つづき）

第二節　番匠川

（四）灘（なだ）

堅田川と番匠川が合流した水が海に出る右岸に、大江灘の部落がつづいている。戸数約百十戸からなる大船渠なる屋敷部落のことを東灘と呼んで、西岸と合せて灘といっている。

ここにも港があった。いやここにこそ港があったという方が適切かも知れない。

まず始めに灘を、歴史上から眺めてみよう。

歴史上から見た灘

明治をさかのぼると橋のないことは常識である。鶴見浦と米水津、木立の二方面に分れる道路の要にあたる茶屋が最橋もその例にもれず、木造の橋が初めて架ったのは、昭和五、六年頃であった。時の野村一也町長が祝辞に明治何年とか読んだので野次がとんだという話がある。

裸の船頭でその名を知られた万おいさんが、木立から佐伯の町に人々を乗せて船を漕いだ頃は、まだ昭和になっ